

読者のページ

ごみ処理一筋一四年

環境事業局 大島 邦雄

私が市役所に入ったのは、清掃工場を次々と建設しているときだった。

仕事相手が変化に富む物だけに、よく詰まったりそれがもとで故障が起きたり、てんでこ舞いの日々だった。(その事は今も、基本的には変わっていない) (ごみは変化に富む物)が、永久不滅の真理ではない事を、後年、他都市の人々から教わった。(ごみクレーンでつかんだごみを炉に入れる時、投入口で詰まる事を「アーチング」という。ふとん、ベニヤ板、生木から風呂桶まで入ってくるのだからまららない。当時は原始的なもの

で、丸太にロープをつけ、勢いを付けた自重で落とすのだが、大した力ではないのでよく二、三時間かかった(後年、器具が設置されたのは、職員が腰痛で数カ月入院した後だった。)

休みに郷里に帰り、親戚の人に仕事を聞かれても「市役所」で終わってしまう。不正確に表現しようとする気持がよけい気にかかる。母が「そのうち本局へ行ける」などと口添えしてくると、後めたさをよけい感じてしまう。(自分の業務を正確に他人に説明できるようにしたのは後年「自分の職業に胸を張って生きている人々」を知ってからだ。)

後めたさの原因は、労働条件の劣悪さにあると思つた。職場改善は取り組まれ手当も上つた。しかしまだ拭いきれない。職場(役所)の外にその原因はあつた。

建設計画が出されると住民の反対があつた。私の職場は「迷惑施設」だったのだ。たしかにプールは併設した。しかし住民の「意識」の上では、プールのプラスが迷惑施設のマイナスを

相殺しているにすぎない。

その施設の存在を「迷惑だ」と思う住民にとって「迷惑さ」を維持する事しきれない職員は、有難くない存在に見える。ここに職業差別思想の発生する根拠がある。

私たちは、家庭でごみを邪魔物として出す。主婦は収集員に札を言う。邪魔物を自宅から消してくれたからだ。ごみの出し方を見るとその町の品位が分ると収集員は言う。大切だと思わない物に人は手間隙をかける。い。

きれいな町作りとして、コンテナが設置された。成功した様に見えた。が、ごみ問題への関心が低いのはコンテナ実施地区、と数字は示す。Y市では、家庭の玄関先でごみを消してみせる機械を取り付けるといふ。まさに魔法の壺だ。しかし、栓を開けたばっかりに出てきた魔王は、人々の「心」を腐らせる。行政とは何か。技術の粋を集める事なり。職員は設備の子守役なり。政治とは、「善政」を「施す」事なり。

ギリシャ滅亡はごみで埋れたから、と言う。

「調査季報」は職員が自由に意見を発表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。都市科学研究室まで(電話六七一一二〇二九)。

この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自油体問題等、題材は自由。一〇〇〇字以内。

△あとがき▽

私達は、毎日毎日ごみを出し続けている。家庭からは、月・水・金曜日あるいは、火・木・土曜日の週三回、ポリ容器や袋でごみを収集場所に出している。家庭に限らず、職場からもごみを出し続けている。机の横のごみ入れは、毎日紙くずであふれ、どんどん捨てていく。

商店からスーパーから、レストランから工場から……あらゆるところから、私達人間はごみを出し続けている。

このごみは、収集され、運搬され、焼却、埋め立てといった経路をたどり処分されている。収集されて私達の眼から見えない

くなつたごみは、清掃工場で燃やし続け、それでもなお残る灰は、トラックで埋め立て地に運ばれる。内陸の埋め立て地にはカラスがあふれ、近くに行っても全く逃げない。ヒッチコックの「鳥」を思い出させる。しかも埋め立て地をこれ以上確保するのは難しい。

大量生産と大量消費を続ける現代社会で、都市はごみとどのようになり立ち向かっていこうとしているのであろうか。量の増大と質の悪化にどう対処しようとしているのであろうか。埋め立て地の確保はできるのだろうか。資源化が採算ベースに合わないとしたら、企業や自治体、国が負担するのだろうか。

多くの課題が次々と起こってくる。もはやごみを排除するだけでは問題が解決しない時期にきているのではないだろうか。今までの取り組みを振り返り、全国での取り組み、世界各地の考え方や工夫を学び、ごみと共存する道をさぐるしかないのではないか。今はそんな時代になっているような気がする。ごみとの共存をめざして……加藤▽